1987 春の特別展

# 郷土玩具に見る生活文化史

*－その歩みと系譜をさぐる－*

郷土玩具は様々な年中行事や信仰、生活の営みが込められています。
秘められた庶民の祈りや心を探ってみませんか。

期間　　１９８７年３月１日（日）～５月３１日（日）
主催・場所　**神戸深江生活文化史料館**
協力　　芦屋市教育委員会

## 出品目録

＜青森県＞

**１．２．　八戸の八幡馬**
櫛引八幡宮の例大祭（旧８月15日）に売り出される木馬。鎌倉時代初期に旅の木工師が泥中から馬形の木片を拾い、木馬を作ったのが起こりという。また例大祭に流鏑馬の奉納があり、名騎手名馬が技を競ったのにちなみ木彫りの駒を作ったとも伝えられる。さらに、この地方の嫁入りの時の乗馬の盛装を表したものという説もある。日本三駒の一つ。

**３．　弘前の馬の首**

＜岩手県＞

**４．　チャグチャグ馬っ子**
江戸時代、藩主南部侯が馬産を奨励し、優良馬産出の家では、端午の節句の日に愛馬に多くの鈴をつけ、蒼前神社（盛岡市郊外）に参詣した。その時、馬の首の鈴がチャグチャグとなるところからこの名が付き、昭和初期にこの馬の姿を玩具化した。

＜宮城県＞

**５．６．　木下駒**
昔、陸奥国分寺（仙台市）の境内で馬市が開かれ、良馬を選んで京の朝廷に献上する行事があった。それをかたどった馬玩具で、江戸時代に馬商人がこれを作って売ったという。同寺の節句祭り（旧３月３日）に参道の露店で売られる。日本三駒の一つ。

**７．　こま**

**８．　鳴子こけし**
こけしは東北六県に昔から生活している木地屋たちがロクロで挽いた木製人形であるが、中でも代表的地位にあるのが鳴子こけしである。首がはめ込み式になっていて、キイキイ鳴るのが特色。

＜山形県＞

**９．　鶴岡の板獅子**
江戸時代末期から、庄内（鶴岡）藩の下級武士の手内職として作り出された。祭礼縁日には招福、魔よけの玩具として子供に愛された。一時姿を消したが戦後復活した。上下に振ると上板の獅子頭の口がパクパク開いてカタカタと鳴る。

＜福島県＞

**１０．　若松張子（熊車）**
**１１．　若松張子（赤ベコ）**
織豊期、会津若松に転封された蒲生氏郷が京都から職人を招き、無役の藩士に生活の資としてその技法を習得させたのが始まりという。四輪の車台付きが多かったが、戦後はこの車が省略されるようになった。

**１２．　三春張子（羊）**
江戸時代中期に、三春藩主が農閑期の副業奨励のために江戸の人形師を連れてきて、張り抜き人形製作の技法を農民に習得させたのが始まり。現在では数軒が伝統を守り製作を続けている。

＜新潟県＞

**１３．　二十村の木牛**
古くから小千谷近郊の二十村で行なわれてきた牛の角突き（闘牛）行事にちなんで作られた。毎年７月、この闘牛がある季節には、闘牛の晴れ姿を表した木牛を子供に与えたという。農家の季節的手づくりで入手は困難だったが、現在では木工業者が製作。

＜長野県＞

**１４～１６．　桐原のわら馬**
桐原地方（長野市）は、昔名馬の産地として知られ、またこの一帯で盛んであった養蚕と結びついて、縁起物としてわら馬が作られるようになったという。同地の桐原牧神社の祭礼（旧２月８日）にはこれを供え、豊作や子供の無病息災を祈った。現在は地元の保存会によって作られている。

＜愛知県＞

**１７．　名古屋の鉢巻だるま**
豆絞りの鉢巻を締めている黒目のだるま。東日本のだるまが一般に白目であるのに対し、これは目玉の書き入れてあるのが特徴。また鉢巻姿は、愛知以西にみられ、この鉢巻だるまは、関東系との境界線を示す。明治１４・５年頃から始まったと言われる。この地方には、他に裃をつけた狐が上に乗った作品などもあったが、現在では姿を消している。

＜富山県＞

**１８．　すくい人形**

＜福井県＞

**１９．　気比神宮の桃太郎神像**
敦賀市の気比神宮から授与される童姿の土製の神像。同神宮の祭神気比津彦命が、吉備（岡山）地方の凶鬼を平定したという物語から生まれ、この縁起が桃太郎伝説のもとになったという。神像は、２つに割れた桃の間に神代姿の祭神が立ち、子育て、子授け、の縁起物とされる。

＜滋賀県＞

**２０．　草津張子（ピンピン鯛）**
草津地方で江戸時代から作られた。この地方では、子供が生まれると、疱瘡よけのまじないとして、赤い張子を贈る風習があり、ピンピン鯛は、もっぱら女児に贈られた。昭和初期、ピンピン鯛は姿を消した。

**２１．　日吉神社の守猿**
大津市坂本日吉神社では、例祭（４月14日）で神猿がみこしの供をするならわし。この神猿を形どったもので、魔よけの猿とされ、また「まさる」といって、開運のしるしにもされた。

＜奈良県＞

**２２．　信貴山虎面**
信貴山の朝護孫子寺は、聖徳太子の建立とも、平安時代に醍醐天皇の命で建立されたとも伝える。本尊は、仏教から仏を守る毘沙門天（多聞天）で、南北朝時代の南朝方の武将、楠正成は、母がこの寺にこもって生まれたといい、幼名を多聞という。

**２３．　初瀬土人形（出雲犬）**
**２４．　初瀬土人形（出雲猿）**
桜井市出雲産で出雲人形ともいう。江戸時代、京都・伏見人形をまねて始まったが、絵の具の品質が悪くて色がはげやすく「ベト人形」とも。また出雲は、長谷寺の参道にあたり門前の初瀬で参詣客に売られたことから、初瀬土人形の名前がついた。農閑の副業として盛えたが、大正時代から衰退した。

**２５．　子安地蔵絵馬**
東大寺念仏堂の子安地蔵に奉納されている絵馬。子安地蔵は、安産や子授け、子育てなどを祈願する民間信仰の対象として全国に分布している。

**２６．　長谷寺絵馬**
昔は入浴嫌いの子供がとても多く、親にとっては頭痛の種で、入浴嫌いが治るようにと母子入浴図を絵馬に描いて奉納した。こうした形の絵馬を小絵馬といい、民間信仰を表現したものが多く、描法も略筆ながら要点をつかんだ秀作が多い。

＜京都府＞

**２７．　山科毘沙門の虎面**
毘沙門堂から節分に授与される張子の面。丸顔でユーモラスな描線が特徴。大正１５年の初寅の時に、信者に授与したのが始まりという。門戸につるせば魔よけになるといわれた。

**２８．　嵯峨面（烏天狗）**
**２９．　嵯峨面（赤鬼面）**
鎌倉時代に始まり右京区嵯峨の釈迦堂に伝えられる、大念仏狂言で使う面を模したもの。嵯峨紙を重ね張りして細かな稜線を出し、木彫りのような特徴をもつ。魔よけ面、福神、福徳面など二十数種の面がある。昭和初期に始まり、戦時中姿を消していたが、戦後復活した。

**３０．　千本釈迦堂のおかめ面**
千本釈迦堂は、安貞元年（１２２７）建築された京都旧市内の最古の木造建築物で、国宝。建築の親方の妻おかめの供養塔がある。おかめは、ミスをした夫を助けたが、その秘密を守るために棟上げ式を前に自殺した。夫は妻の似顔絵を書いた御幣を掲げたという伝承があり、今でも棟上げ式ではこの風習を守っている所がある。堂内にはさまざまなおかめ人形が奉納され、おかめの寺として有名。

**３１．　梨木神社の追儺面**
梨木神社は京都御所の東側にある神社。明治維新で活躍した三条実万、実美をまつる。節分で鬼追いの行事が行われ、この面を模した紙面で、昭和初期まで授与されていた。昭和４５年の節分から復活されている。

**３２．　伏見土人形（饅頭喰人形）**
**３３．　伏見土人形（友引人形）**
**３４．　伏見土人形（大日寺の牛）**
**３５．　伏見土人形（馬乗武者）**
**３６．　伏見の土鈴**
伏見稲荷神社付近で始まった土人形で、日本最古という。神社の参道で売られたため「稲荷人形」、地名を取って「深草人形」とも呼ばれる。奈良時代以前からこの地方に土着した土師部の土器作りから生まれたといい、平安時代後期には、宮中に献上する焼物師がいたという記録がある。土人形を創始したのは、鵜（いかるが）屋幸右衛門という江戸初期の人物とされ、元和年間（1615～24）にはすでに人形製作・販売の業者が仲間を作っていた。文化・文政期（1804～30）が全盛期で、社前などで売られてたほか、遠くは九州、四国、中国地方などまで送られたが、明治以降衰退、組合も大正初期までは続いたが、その後転廃業者が相次ぎ、現在は細々と続いているだけである。
この人形は低温で焼くため破損しやすいが、くだけた土は再び稲荷山の土に帰るという信仰があった。伏見人形は縁起物をはじめ風俗も題材に取り入れている。このうち「饅頭喰い」は父母のどちらが好きかと問われた童児が饅頭を二つに割ってどちらがおいしいかと反問したという教訓話を題材にし、子供が利口になるまじない、安産祈願に奉納された。また「友引人形」は一種の埋葬人形。友引の日に葬儀を行うのを嫌い、やむを得ない場合は、京都地方ではこの人形を棺にいれる風習があった。この伝統は古く、平安時代には天皇の葬送に、皇子らの身代わりを棺にいれていた。しかし近年ではこの風習もすたれ、伏見人形にも友引人形はほとんどみられない。「大日寺の牛」は、神戸市長田区の明泉寺（大日寺）の牛を形どったもの。本尊の大日如来は、生命の象徴で牛の無病息災を願う農民が参詣した。また牛は草を喰うことから、瘡（くさ＝できもの）を治すと信仰され、土製の牛を寺から借りて帰り、全快するとお礼に倍にして返すという風習があり、寺には約千体の土製の牛が奉納されている。昔は兵庫区夢野の瓦師が作っていたが、昭和初期から、伏見から取り寄せるようになった。しかしこの風習も今ではすっかり忘れられている。「土鈴」は虫よけに効果があると信じられていた。

３７．　嵯峨愛宕人形硯
愛宕神社の社前で昭和初年まで土産として売られていた。硯を人形にしたてたもので、天神、小野道風、相撲、姫、鯛、花など種類が多い。有馬の人形筆や奈良の人形墨とともに書道の玩具として珍重がられた。

３８．　三宅八幡はと笛
三宅八幡は洛北にあり、別名虫八幡ともよばれる。昔から子供の虫封じを祈願し、土鳩を受けて神棚に飾り虫が切れるとこれをもってお礼参りに行く風習があった。製造は昔から伏見で行われている。一般に、鳩笛は吹くとホーホーと山鳩の鳴くような音がするが、昔は音のする玩具は少なかった。

３９．　鰻の絵馬
鰻は京都市下京区の三島神社の使であり、氏子は鰻を食べず、祈願のときは鰻を絵馬に描いて奉納するという。三島神社の鰻絵馬は二種類あって二尾の絵馬が夫婦、三尾の絵馬が親子を表わしている。この神社は安産の神として信仰され、妊娠すると安産の願をかけ、子供が生まれると絵馬を奉納する風習がある。

＜大阪府＞

４０．　大阪張子（振槌）
４１．　大阪張子（福うさぎ）
４２．　大阪張子（馬）
４３．　大阪張子（首振猿）
江戸時代末期から、天王寺をはじめ大阪の市中で作られた。相撲人形、天神、振槌など約六十種類あり、品質もよく、各地の張子に影響を与えたが、終戦までにほとんど姿を消した。

４４．　富田土鈴

４５．　住吉の土人形（組み猿）
４６．　住吉の土人形（雷）
４７．　住吉の土人形（虚無僧）
４８．　住吉の土人形（子守）
４９．　住吉の土人形（種貸さん）
５０．　住吉の土人形（饅頭喰）
５１．　住吉の土人形（青面金剛）
５２．　住吉の土人形（たいの香合）
江戸時代に伏見人形の流れをくむ土人形として住吉大社門前で始められた。今では廃絶し、堺土人形、伏見人形として伝えられる。金銭や性など現世利益を願う俗信と結びついたものが多い。このうち「種貸さん」は、大社の末社、苗見神社にちなみ巫女が赤ん坊を抱いたもの。子宝の種を貸すことからこの名がある。なお、香合とは香料をいれる容器のこと。

５３．　住吉の貝合わせ
貝合わせは、平安時代末期から始まった遊び。３６０個のはまぐりを数人が分けて持ち、一枚を床に並べ、もう一枚を順番に出して対になる貝を探した。合わせやすいように、貝に絵を書いたり、和歌の上の句と下の句を書いた。この貝には「住よしの　松のみどりの千代かけて　むすぶえにしの　おもと人形」という和歌がかかれている。

＜兵庫県＞

５４．　姫路張子（お多福）
５５．　姫路張子（半面、大黒）
５６．　姫路張子（半面、さむらい）
５７．　姫路張子（半面、女）
５８．　姫路張子（半面、はちまき）
５９．　姫路張子（半面、泣き）
６０．　姫路張子（半面、おこり）
明治の初めに、大阪で張子の技術を修業してきた豊岡（屋号豊国屋）直七が、作り始めた。直七は明治中頃廃業し、甥の松尾熊吉と常吉の兄弟が継いだ。
張子は普通、木型を用いるが、姫路は土の瓦型を使っている。種類は面が主力だが、他にダルマ、虎、獅子頭、首馬、ぼてかずら、三ツ山などが作られている。面は、天狗、鬼、般若、清正、獅子冠り、お多福、ひょっとこ、半面各種など４０～５０種ある。姫路張子は薄張であるが質もよく、安価なこともあって、市内や大阪松屋町の玩具問屋を通じて全国的な販路があった。最近は姫路を代表する郷土玩具として人気を集め姫路城内の売店などで売られている。松尾家は熊吉のあと好夫、隆と続き、常吉は、一夫、真肥と続いて、今も、三代目として、隆、真肥が専業として張子作りにいそしんでいる。今回展示しているのは、いずれも松尾好夫作の面である。

６１．長田神社の鬼追式絵馬
２月３日に行われる追儺式の絵馬である。７名の鬼役５名の太刀役などが舞う。式が終ったあとの餅花や松明の焼之殻は参拝者に分け与えられ、玄関先に護符として飾られる。この追儺式は昭和４５年３月３０日、県の重要無形文化財に指定されている。

６２．　長田神社のはじき猿
下の竹バネを弾くと猿が飛びあがるおもちゃで、「はじきさる」という語呂が災厄を弾き去るに通じる。長田神社のはじき猿の特徴は、猿の背に鈴がついている点。江戸時代の終わりには各地の社寺の縁日で売られていたが、長田神社では昭和初めに廃絶した。

６３．　稲畑土人形
氷上町稲畑で作られている土人形で弘化３年（１８４６）赤井若太郎忠常が始めた。明治時代が最盛期で、７～８軒が作っていたが、現在は赤井家のみである。良質の土を使っているため軽く、手足などの突起部分を少なくし形を単純化しているという特徴がある。

＜鳥取県＞

６４．　流しびな
流しびなは室町時代から伝わるといわれ、昔は全国にあったが今は鳥取地方が代表である。旧暦のひな節句のあと、サン俵、オシキなどに夫婦びな、あられ、ひしもち、桃の小枝をのせ、もろもろの災厄を負わせて川に流す、いわば厄落としの風習である。

＜島根県＞

６５．　出雲張子の虎
古くから出雲地方で魔除けとして飾られる色彩の華やかな張子の虎で、松江の木彫りの名工荒川亀斎の原型から、明治１１年（１８７８）張子の首振り虎に改めた。尾は取り外しができる。昭和３７年の年賀切手図案に採用された。

６６．６７．松江のあねさま
島根県松江市の紙人形。松江藩の御殿女中の手遊びとして始まったといわれ、明治以降、下級士族の婦女子の内職となったという。ひなさん、紙びなさんとも呼ばれた。松江中学に赴任した英国人ラフカディオ・ハ

ーン（小泉八雲）がこの人形を愛したことで有名で、大英博物館に送ったという逸話もある。現在は島田、お下げ、桃割れの髪形の三種類を一組とし、市内唯一の製作者が小泉八雲記念館などで販売している。

＜広島県＞

**６８．　阿伏兎観音の乳絵馬**
備後（広島県）靭ノ津の阿伏兎観音に奉納された絵馬である。乳の出の悪い母親が、乳が出るようにとの願いをこめ、またお礼参りの時に布で乳形を作り、板にとりつけて奉納した。

**６９．　トラヘイ馬**
吉備高原の庄原市で小正月に用いられる馬。若者たちが、わら馬を各家に届け「トラヘイ、トラヘイ」と声をかける。各戸では返礼に餅、米、金銭を与える。わら馬は神棚に供え、新しい年の幸運を願った。この行事は大正末期頃から次第に姿を消し、現在ではほとんど見られなくなった。

**７０．　亀持人形**

＜高知県＞

**７１．　鯨車**
**７２．　鯨船**
捕鯨の中心地にふさわしく、もと室戸の漁師が出漁からの帰途にわが子の土産に作ったのが始まりという。鯨車は四輪の台の上にくじらが乗っており、鯨舟は捕鯨大漁の祝いのため飾りつけた鯨舟の面影を模したものである。

＜愛媛県＞

**７３．７４．　松山の鎧人形**
松山市内や道後温泉で売られてきた武者人形で、江戸時代、松山藩祖松平定勝の嫡男定吉が若くして病没した際その武徳をしのんでつくられたという。頭は太閤秀吉、加藤清正などの武者を主に１２種ほどあり、自由に差し替えが出来る。東雲神社境内にある豊後神社にこの人形を供えて祈ると、子供が健康に育ち病気も快癒すると信じられている。首と胴が土製、鎧の袖、直垂などは木綿の端切れを用い、人形の手についている竹串を動かして、子供たちはあやつり芝居のまねをして遊んだ。

＜福岡県＞

**７５．　太宰府の魔除け鈴**
寺社の授与鈴は、昭和の初期に全国的なブームになった。寺社の縁起などと結び付いて、魔よけの土鈴として売られるようになった。太宰府天満宮は、平安時代に右大臣で陰謀のために地位を奪われた菅原道真をまつる。

**７６．　英彦山のガラガラ土鈴**
英彦山（ひこさん）の権現を勧請した時、土中から古鈴が見つかったという縁起にちなむ。魔除けになると門口につるす風習があった。素朴でかつ洒脱な作風で全国の土鈴の中でも秀一の作品。

＜長崎県＞

**７７．　鯨の汐ふき**
長崎の諏訪神社の秋祭「おくんち」（１０月７日～９日）に曳かれる鯨の汐ふきの山車を玩具化したもの。この祭礼は寛永１１年（１６３４）に始められ、各町内が趣向を凝らした曳き物を奉納した。鯨のだんじりは安永５年（１７７６）初奉納以来の名物である。玩具は黒色の張子製で、紐で曳くと両方のひれが揺れ動く仕掛けになっている。方言で「鯨ンしょひき」と呼ばれ、昭和３２年の年賀切手図案になった。

＜熊本県＞

**７８．人吉のきじ車**
源平争乱の昔、平家の落武者が人吉の山奥に隠れ住んで、生活の糧に木地玩具を手作りして人吉のえびす市（２月）に売ったのが始まりという。現在では熊本県の代表的な郷土玩具として知られている。

**７９．日奈久温泉のベンタ人形**
江戸時代これを創始した作者の名をとって「ベンタ（弁太）人形」と呼ぶが、孝行者を助けて病に効き目のある温泉を見つけたという娘おきんを題材にし「おきん女（じょ）」ともいう。古くは土人形であったが、明治期にはいって現在の木製となったもので、桐下駄の余材が用いられている。旧土用の丑の日に温泉神社で「おきん女替え」という行事が行われる。

**８０．日奈久温泉の板ずもう**
桐の薄板二枚で両力士を作っており、腕の中央の穴に棒を差し込んで動かすと、相撲を取る動作をする。温泉神社の祭礼に行われる奉納相撲にちなんだもの、子供の土産として売られる。

**８１．　宇土張子（面かぶり）**
**８２．　宇土張子（人力車）**
江戸時代に始まるとも言われ、また明治２０年頃広島からきた旅人が張子製作の技法を伝えたとも言われている。代表的作品には、「虎車」「相撲取り」「おきなさん」があるが、今回展示の「面かぶり」はでこ回わし姿の童児が狐面を持っており、後部の糸をひくと狐面をかぶったり取ったりする。「人力車」は明治時代の習俗を表現している。

＜佐賀県＞

**８３．　のごみ人形（十二支）**
佐賀県の能古見祐徳稲荷の土産物用として戦後登場した。鍋島家祖の戦勝祝いから始まったといわれ、雨乞い、病虫害退治を祈願する年中行事の「面浮立」を題材にした作品や、祐徳稲荷の初午に売り出される稲荷駒などがある。十二支土鈴の一つ、兎鈴は昭和３８年の年賀切手図案になった。

（参考文献）
日本人形玩具辞典　斎藤良輔編　東京堂出版　昭和43
郷土玩具の旅　斎藤良輔　芸艸社　昭和56
日本郷土玩具辞典　西沢笛畝　岩崎美術社　昭和40
兵庫の郷土玩具　井上重義　神戸新聞出版センター　昭和56
日本の郷土玩具　木下亀城郎　保育社　昭和37

（出品目録執筆者）
大国正美（研究員）　川口さつき（主事）
道谷　卓（調査員）　西村　敦（事務局員）